

Sāṃkhya 思想における 認識主体の問題

—upādhi, caitanya を中心として—

浅 野 玄 誠

は じ め に

Sāṃkhya 思想の研究の流れは、従来、SK を主要テキストと定め、註釈類に『金七十論』Gauḍ, MT, TK, J, 等を重視してきた。

これは、Deussen, Oldenberg といった大学者の Sāṃkhya 研究に負うところが大きく、彼らは、Sāṃkhya の起源を Upaniṣad に求め、SK によって思想的な完成を見、その後に Yoga の発達を見る。この問題は、他学説との相互関係を視野に入れながら、経典、註釈類の作品および作者の歴史的な位置づけ、思想的立脚地を明らかにしてゆく問題点と密接に連絡している。

宇井伯壽博士もすでに、R. Garbe の説を念頭に置きながら、Upaniṣad→Classical Sāṃkhya→Yoga といったあまりに整然たるこうした考え方には異を唱えておられるが、それは至極当然のことであろう。なぜなら SK を不動の根本聖典として Sāṃkhya の標準に据えることに確たる根拠はないからである。たしかに金倉圓照博士の述べるように、SK は、それ以前の常に変化してやまなかった Sāṃkhya 思想の流れに終止符を打つべく現われた全 Sāṃkhya 思想中最も注目^⑤に値する書物である。しかし散逸したとはいえ伝承に現れる SK 以前の『六十科論』(Śaṣṭitantra) や後世の SS に対しても当然注意が払われるべきであり、他学派のストトラ中に登場する Sāṃkhya 論師の断片も又、見逃すことはできない。

幸い近年になって本多恵先生の『サーンキヤ哲学研究 下』(春秋社 S56) に SS とその註釈書 Pravacana-bhāṣya, Vṛtti を加えた全和訳が出された他、村上真完先生の『サーンキヤ哲学研究—インド哲学における自我観—』(春秋社 1978) の第 4 章第 8 節、第 5 章第 2 節に SS が重く参照される等、研

究領域の広がりや成果をみせつつある。本多書の上巻には、SK 以前の典籍としての『六十科論』への価値ある言及もみられる。

こうした研究成果に大いに啓発されながら、筆者は現在、SK 以前、SK とその註釈類の時代、SS 時代を通観し、Sāṃkhya の思想的な潮流のなかに現れる重要な概念を核として、Sāṃkhya 思想の歴史的な変化、他学説との交渉、あるいは Sāṃkhya の思想的立脚点の再点検をおこなっている。本稿では、Sāṃkhya 思想における認識主体の問題を核として、その問題の元に有機的に干渉する upādhi と caitanya について論じてみたい。

1. upādhi

upādhi という用語は、Sāṃkhya 思想を SK を中心として考える限り、特殊な用語である。SK 本文には用いられることなく、その註釈類でも、後期の部類にある TK に2ヶ所^⑥みられるにすぎない。一般的には Vedānta の影響によるものと考えられているが、仏教文献にも苦を生ずる原因^⑦、あるいは束縛の因としての upādhi の用例が多く指摘されている。TK がこの用語を用いる直接の影響は Yoga からのものであろうと予想されるが、このあたりの相互関係については明言できない。

一方 SS には5ヶ所^⑧その用例をみることができ、それらは内容的に大きく二つのグループに分けることができる。一つは、我 (ātman) の一・多をめぐる論争中に現われ、Vij の註釈に紹介される如く、「唯一なるアートマンにとって、原因と結果との限定 (upādhi) における影像 (pratibimba) が、靈魂 (jīva) と神 (īśvara) とである」(ekasyāi-'vā' tmanaḥ kārya-kāraṇa' paḍiṣu pratibimbāni jive' śvarāḥ Vij ad SS-I-151) とする Advaita 派の upādhi の概念を想定した論争である。

もう一つは、SS-I-150, 151 にあらわれる upādhi であり、これは本来非活動である puruṣa が如何にして移行 (gati) を伴う精神活動を行うのかという問いに対する SS 側の解答として用意されたスートラであり、精神活動の核としての認識主体の問題を考えるうえで重要な概念である。

A) SK, SS にあらわれる upādhi

先にも述べた如く SK 本文および古註に upādhi という用語を見つけることはできない。TK になってようやく2ヶ所その用例をみることになる。

相 (līṅga) とは所遍 (vyāpya) であり有相 (līṅgin) とは能遍 (vyāpaka) である。疑わしく、内抱される限定 (upādhi) を排除することによって、事物の本質に結びつくものが所遍である。そしてこれ (所遍) に結合するものがすなわち能遍である。^⑨ (TK ad SK-5)

これは SK-5 に、現量、比重、聖言量の三つの量 (pramāṇa) が示されたのに対して、TK が比量 (anumāna) の解説に際し、比量の前提となる相 (līṅga) の能所をいわんとし、用いられた「悪しき限定」という意味での upādhi である。こうした使用条件の元での upādhi の用例は特に珍しいものではなく、^⑩ インド思想全般の流れの中で、upādhi が一般的な用語としての地位を占めるようになっている状況を窺うことができよう。

注目すべきは SK-8 に対する TK 中にみられる upādhi の用例である。

さらに又「唯一なる puruṣa にとっても、肉体の制約 (upadāna) の区別の故に、(個別的) 相違がある」と主張することはできない。なぜなら、手、乳房等の限定 (upādhi) の区別によっても又、生死等の (個別的) 相違をあやまって見定める (prasaṅga) (ことになりかねない) からである。^⑪

(TK ad SK-18)

SK はいうまでもなく多我説を採るが、その論証中の一節である。puruṣa の一・多をめぐる問題は、一元論を採る Vedānta 学派との関係の上でも重要な課題である。アンダーラインを附した対論者の主張は、おそらくは Śaṅkara 派の主張を想定しているのであろう。

すでに述べたように、SS での upādhi の用例を大きく二つのグループに分けると、その一方がこの TK と同じく Śaṅkara 派の主張に対する論難として提起されている。

限定 (upādhi) の区別がある場合でも、唯一なるものの種々の結合がある。

あたかも瓶等によって虚空 (のさまざまな変化がある) ように。

upādhi-bhede' py ekasya nānā-yoga, ākāśasye' va ghaṭṭā' dibhiḥ

SS-I-150

このスートラに先立ち Vij は「我が唯一であっても、限定 (upādhi) という形での限定するものの区別によって、生 (janma) 等の (個別的) 相違があろう」(puruṣai' kye' py upādhi-rūpā' vacchedaka-bhedena janmā' di-vyavasthā bhavet) とする対論者の意見を紹介するが、これも明らかに Śaṅkara 派を意識してのことであろう。この対論者の意見を受けてスートラは、

限定は異なるがそれを有するものはそうではない。

upādhir bhidyate' na tu tad-vān

SS-I-151

と述べる。この註釈でも Vij は、すでに記した「唯一の我が原因と結果との……」とする対論者の説を掲げているが、Vij 自身「ある新 Vedānta 学派を自称する人々が述べた」(yad api kecin navinā vedānti-bruvā āha) と紹介するのを待つまでもなく、明らかに Śaṅkara 派の思想を念頭に置いているといえよう。ただし、一元論的世界観を所依の思想とする Vij は、博識をもって註釈家としての忠実な仕事を心掛けた Vāc に比して、その後につづく多我説立証の論理展開では、TK ほど明晰な姿勢を示さない。それでも SK 本文と古註とにみられない新たな姿勢が TK にあらわれ、SS とその註釈類がそれを継承している事実は、upādhi という重要な用語を介するだけに注目に値する。

さらに、SS-I-151 の註釈中、Vij が対論者の意見を仮想し、そこに影像(pratibimba)という概念を持ち込んでいる点にも注意すべきであろう。サーンキヤ思想における影像説(pratibimba-vāda)については、すでに詳しい研究があるが、中でも村上真完先生は、SK-5 に対する KT の註釈を引用して、イ) buddhi から puruṣa へ、ロ) puruṣa から buddhi へ、の2種類の影像説の存在を認めておられる。ただし、村上先生は「TK の映像説は簡に過ぎて、比喩の例示もなく、その意味を十分に確定しえないようであった」とも指摘しておられるが、SK-8 の註解にみたように、puruṣa の一・多の論争に Śaṅkara 的な対論者を立て、upādhi という概念を導入している限り、SS-I-151 に対する Vij の註解程度の影像説への理解はあったとみてしかるべきであろう。

SS にあらわれる upādhi のもう一つのグループ、それは、本来非活動である puruṣa が如何にして移行(gati)を伴う精神活動を行うのか、という問いに対する SS の解答として用意されている。

移行(gati)を説く天啓聖典もまた限定(upādhi)との結合の故に(説くのである)。虚空の如し。

gati-śrutir apy upādhi-yogād ākāśa-vat

SS-I-51

また、移行(gati)を説く天啓聖典は、能遍なるものであっても、限定(upādhi)との結合の故に享受の時と場所を得る(と説くのである)。虚空の如し。

gati-śruteś ca vyāpakatve' py upādhi-yogād bhoga-deśa-kāla-lābho
vyomavat SS-I-59

さて、この2ストトラに対し、Vij はそれほど熱心な解説を試みない。そればかりか SS-I-51 に対する註釈では、Sāṃkhya 本来の思想から逸脱しかねない、我の遍在性の是認ともとりうる理解を示している。一方 An はストトラの原義に忠実にしてしかも興味深い註解を試みている。ここでは SS-VI-59 に対する An 註より、特に注目すべき2ヶ所のみを取り上げて検討してみたい。

①また虚空は遍在で、部分的に存在する煙等との結合によっては汚れたものとはならず、そうではなく、瓶等に限定されて存在するもの、即ち瓶等の内部に存在するものは汚れていると考えられている如くである。(ところが)そこにおいても、虚空は汚れているのではない。それを汚すものは無いから。そうではなく、(汚れていると思うのは) 無区別なるものの虚妄なる謬見 (mithyā'-bhimāna) にすぎない。

②同様に我は遍在していて、それには属性等との結合はなく、認識さえもない。そうではなく、肉体等に限定されることによって、風、火と結合する如く、靈魂 (jīva) と関係することによって、意 (manas) と結合する故に個我 (jīvā'-tma) と云われるのである。¹³ (An ad SS-VI-59)

①本来属性を持たない puruṣa が無区別 (aviveka) なるものの謬見により属性を持つものの如くなるということ、② puruṣa が prakṛty あるいは buddhi ではなく manas と結合して認識活動を伴う個我となると述べられる点、これらは Sāṃkhya の歴史上非常に興味深い問題提起であるが、我々は既にこのような考え方を、Sāṃkhya の古論師と目される Vindh にみることができ。次に Vindh の断片を整理した上でこの問題を論究したい。

B) Vindh の断片にあらわれる upādhi

Vindh の断面の歴史的信憑性、およびその内容に関しては既に詳しい研究がある¹⁴。本稿では upādhi という用語に関係の深い断片を取り上げて、SS、SK との相対の元にそれを検討して行きたい。

puruṣa は転変せざることを本質とするものであり無思慮なるものを照らし出す。(無思慮なる) manas は限定 (upādhi) が接近する故に水晶の如く行為する。

puruṣo'vikṛtātmai'va svanirbhāsam-acetanam/manaḥ karoti sāmni-
dhyād-upādheḥ sphaṭiko yathā // Laghvṛtti

この一文は有名なもので、ここに掲載した他、Tarkarahasyadipikā, Syādbādamañjalī, Yogabindu にも、多少のヴァリエントがあるにしても同じ断片が紹介されている。この文章が、Sāṃkhya では SS になって用いられるようになった影像説 (pratibimba-vāda) の原型であると考えられている。Vindh の影像説がどの程度まで SS ないしその註釈の影像説とかかわっているのかはこの断片からは明瞭にはならないが、われわれは傍証として、この断片を紹介する Laghvṛtti の同じ節に Āsuri と共に Sāṃkhya の古論師の一人として紹介される Vādamahārṇava の断片を提示することができる。

覚(buddhi)の鏡に現れるもの、対象を映し出すもの、第2の鏡の如くなるものは puruṣa において上昇する。

buddhi-darpaṇa-saṃkrantam artha-vipratibimbakam / dvitiya-darpaṇa-kalpaṃ puruṣe hy-adhirohati¹⁵

Vij が puruṣa→buddhi, buddhi→puruṣa への相互影像を唱えることは村上先生の研究に明らかであるが、この断片も前半部においては puruṣa→buddhi、後半部で buddhi→puruṣa への影像を唱っていると判断することができる。Laghvṛtti の作者 Manibhadra が影像説をどこまで理解していたかは分からないが、Sāṃkhya の影像説を紹介してこの断片と Vindh の断片を併置していることからして、Vindh 断片と Vij の影像説との関係の近接観を増す傍証にはなろう。

さらにこの Vindh 断片と、既に紹介した SS-VI-59 に対する An 註の②にはおもしろい相似がみられる。An 註には puruṣa が prakṛty, buddhi とではなく manas と結合することにより個我としての働きを持つと述べられているが、ここでも upādhi の接近する対象は manas である。このような manas の扱いは、buddhi, ahaṃkāra, manas の3者を総合的な認識主体として認知する Vindh 固有の論法に基づくものといえようが、An 註の姿勢は、こうした、SK とは異なった Sāṃkhya 思想への傾斜の一面を示していると考えられる。しかもかかる manas の用法は Yoga の citta を思わせるものであり Yoga 思想との関連も追求されてくはない。

ただし An 註の①にみられるような、結合そのものを束縛と考える姿勢は Vindh には存在しない。こちらのほうは、むしろ SS 固有の思想に基づく影

響であり、それは An が aviveka という用語を用いていることから理解することができる。「識別智」(viveka, vivekajñā, vivekakhyāti) については以前拙稿を提出したことがあるが、いまここにその概要を記すならば、1) SK 並びに古註には「識別智」という意味での viveka, vivekajñā, vivekakhyāti の用例はみられない、2) 後期の註釈, TK, J には用語そのものとともにかなり積極的な識別智の概念の導入がみられる、3) Vij の viveka の考え方に avidyā (無明) との相関の上で注目すべきものがある。ここでは 3) に着目する。その場合、Yoga 学派との関係を祖上に乗せることは不可避となろう。以下に Yoga を含めて論を進める。

C) gati, vivekakhyāti ——Yoga との関係を含めて——

すでに、(A) 事物の本質との結合を断ち切る、「疑わしく内包される」苦を生ぜしむる原因としての upādhi, (B) puruṣa の一・多の論争中、一我説擁立者の主張として用いられる upādhi, (C) 影像説立証のための upādhi, (D) 本来非活動である puruṣa の精神活動としての移行(gati)の説明に用いられる upādhi の事例をみてきたが、これらの資料の元で Sāṃkhya における認識主体の問題を考えてゆく場合、SS-VI-59 とその An 註、それに Vindh 断片とが重要な視点を提供しているといえる。さらに既に述べてきた如く、これらは、Yoga との関連の色彩の強い資料である。この Yoga との関連を観察する上でキーワードとなるのは gati, vivekakhyāti である。

さて gati という用語を通して考えるとき、SS-I-51, VI-59 は、本来非活動である puruṣa が認識という活動領域において移行をおこなうのはなぜかという問かけを意識している点において YS-I-22 に対応する。

(対象に) 移行しない (apratisaṅkramā) 精神が、それ (citta 心) の姿をとる場合、自らの覚 (buddhi) を感知する。

citer apratisaṅkramāyās tad-ākārā-'pattau sva-buddhi-saṃvedanam
このスートラには gati は用いられていないが (ここでは pratisaṅkramā), 使われ方からしてほぼ同意とみることができよう。おもしろいことに Vyāsa は、このスートラの意を Pañcāsika の断片に語らせているのである。

実に享受者の能力は不変異にして移行せざるものであるが、変異するもの (覚 buddhi) において移行するかのごとく、その作用は (覚に) 追従する。

かの獲得せられた精神性、即ち獲得された自性たる覚の行為に似たるの
みによって、覚の行為と差別されない知者(puruṣa)の行為が語られるの
である。

apariṇāminī hi bhoktr-śaktir apratisaṅkramā ca pariṇāminy arthe
pratisaṅkrānte-’ve tad-vṛttim anupatati/tasyās ca prāpta-caitanyo-
’pagraha-rūpāya buddhi-vṛttes anukāra-mātratayā buddhi-vṛtṭy-
aviśiṣṭā hi jñāna-vṛttir ākhyāyate // Vyāsa ad YS-VI-22^②

この Pañcaśika 断片は Vindh, Āsri 断片にみられるような puruṣa から
buddhi への影像説をかなり強く反映しているとみることができよう。たし
かに SK は、作者 Īśvarakṛṣṇa に至るまでの系譜に Kapila, Āsri, Pañ-
caśika を数え上げるが、簡明なるこの作品はその本文中に古論師の説を引
用する事はしない。のみならず、ここにみたような古論師の影像説、あるい
は Vindh 断片にみられる manas の用法(これは An 註の manas の用法、
あるいは Yoga の citta に相当する)といった傾向はむしろ希薄である。こ
のあたりの考え方は、SS がその成立課程において Yoga の影響の元に受容
したのであろうが、その Yoga (特に Vyāsa)が同じ問題を古論師に範を採り
ながら論説している事実は重要である。しかも SS の註釈において Vij が束
縛の原因として重視する aviveka (無識別)を Yoga の avidyā (無明)に
近い概念と考えるならば、古論師 → Yoga (特に Vyāsa) → SS (Vij, An を含
む)といった一連の潮流に SK (古註を含む)とは異なった固有の思想的傾
向をみてみる事ができる。さらに SK の後期註釈(特に TK)は、この二つ
の流れの間ではその双方にまたがる微妙な地位を占めているといえる。

ここで筆者が SK (古註を含む)とは異なる固有の思想的傾向と称するの
は、これまでの展開より明らかな如く、有情の認識主体、すなわち精神性に
関与する思想的傾向を意図している。むしろ SS は SK の継承者を以て任じ
ており、全体的な構造は SK を忠実に再現している。しかし、こと精神性に
関する限り、本論に指摘した部分からも分かるように、SK ほど明確に論理
的な決断を下さない。むしろ Yoga や Vedānta の内抱する問題提起に抵触
するような微妙な傾向を示し、この問題の俎上では SK の忠実な継承者とは
いいがたい。インド思想はいずれも ātman の追求をその最重要課題として
展開している。ātman の追求に付随する精神性、あるいは認識主体に関して
は、そこに見解の異相をみる以上、それらは思想的傾向を異にする潮流とし

て2分されるべきであろう。ここに、精神性あるいは認識主体に関する重要な用語として、caitanya を介する観察を通じて、もう少しこの問題を明らかにしてみたい。

2. Sāṃkhya Yoga に現れる caitanya

caitanya という用語は、大きく分けて、①精神性 ②精神我という二つの訳し分けができるかと思う。このうち②の用例は極めて少なく、唯一 YS-III-34 に関する Vāc 註にそれに近い用例をみることができる。

Sāṃkhya Yoga に一般的に用いられるのは ①の精神性としての用例であるが、YS, SK とも、その本文にこの用語を用いることはない。

YS では Vyāsa が I-9, II-20, VI-22 に対する註釈中で、Vāc が II-6, 16, III-35 に対する註釈中でこの用語を用いている。特に注目すべきは II-20, VI-22 の Vyāsa 註である。

同様に、覚 (buddhi) はすべての対象を捉えるものであるが故に三徳所成であり、三徳所成であるが故に非精神的である。一方 puruṣa は徳(所成なるもの)の観察者であり、それ故に(三徳所成なるものと)同質ではない。それでは異質であるとしよう。完全に異質ではない。何故か？ それは清浄であるにもかかわらず観念を通してみる(からである)。それによって覚のもてる観念に基づいて得られるのであろう、そのようなものを見るものは、それを本質とするものではないにしても、それを本質とするものの如く現れるのである。

この註解は「見者は見るのみのものであり、清浄であるにもかかわらず、観念を通して見る、」(YS-II-20)という Sāṃkhya の典型的主張に基づくスートラに関連し、覚 (buddhi) と我 (puruṣa) との認識作用における役割を説いている。この引用からも分かる如く、Vyāsa は覚の能力を acaitanya (非精神的)であると述べるが、逆に puruṣa に caitanya (精神性)としての徳質が備わるかどうかを明言しない。この註解に引き続き、Vyāsa は、すでに本論でも前章で紹介した Pañcāśika の断片、「実に享受者の能力は不変異にして移行せざるものであるが……」を引用する。この手順は VI-22 にも適用されており、Pañcāśika 断片が Vyāsa の認識作用に対する思想的基点を正す重要な素材となっている。

こうした、SK とは異なる Vyāsa の如き Sāṃkhya Yoga に対する姿勢

は、他学説の Sāṃkhya Yoga 観にも見いだすことができる。9 世紀に活躍した Jaina 教空衣派の学僧 Haribhadra も、その著作 Yoga-bindu の中で、自ら批判すべき対象となる Sāṃkhya Yoga の説として、次のような思想を紹介している。まず、

精神性 (caitanya) は、そこより puruṣa の現れる生得なる性質である。
遮るものがない場合、どうしてこれは自己の享受をなすことがないのか。

(Y-bindu 445)

caitanyaṃ ca nijam rūpaṃ puruṣasyo 'ditaṃ yataḥ / ata āvaraṇā-
'bhāve nai' tat svaphala-kṛt kutaḥ //

と Y-bindu 作者自身の問題提起がなされたのに続いて、彼の批判すべき Sāṃkhya Yoga の思想を仮設する。

それ (puruṣa) は補助因 (prakṛti) と結び付かないことによって、遮るもの (manas) に関与しない。またこれ (puruṣa) は (知ることが) それ自身の性質であるが故に知ることもない。

(Y-bindu 446)

na nimitta-viyogena tad dhy āvaraṇa-saṅgatam / na ca tat-tat-sva-
bhāvatāt samvedanam idam yataḥ //

精神性 (caitanya) がまさに識別 (vijñāna) であるというのは、我々の教説ではない。そうではなく、それ (識別) は大 (mahat) の属性であり、prakṛti より大は生ずる。

(Y-bindu 447)

caitanyaṃ eva vijñānam iti nā'smākam-āgamaḥ / kantu tan mahato dharmaḥ prakṛtaś ca mahān api //

puruṣa は転変せざるものであり、それ自身輝きを持てるものであり、無知覚 (acetana) である。manas は (puruṣa が) 近づくことによって行為する。限定 (upādhi) が水晶に (近づいて色を添える) 如く。

(Y-bindu 449)

puruṣo' vikṛtātmai' va svanirbhāsam acetanam / manaḥ karoti
sānnidhyād sphaṭikam yathā //

(puruṣa とは) 差別され、可視的な転変を行う buddhi における享受は、清浄なる水における月の影像の生起の如く語られる。(Y-bindu 450)

vibhakte dṛk pariṇatau buddhau bhogo'sya kathyate / pratibimbo-
'dayaḥ svacche yathā candram aso'mbhasi //

449 は第 1 章で紹介した Laghvṛtti に登場する Vindh 断片と同一であり、

puruṣa から manas への特殊な影像説を説く一文である。450は Āsri 断片と目される偈頌であり、水に映るの月の比喻による影像説を唱えている。

Y-bindu に紹介される Sāṃkhya Yoga は、概括的には極めて Vyāsa の見解に近いといえる。ここでは、caitanya と vijñāna を分別し、顕現者たる大 (mahat) の属性としては vijñāna を当てるが、caitanya そのものの所在には言及していない。さらに 446 にみられる如く、ただ知るのみの存在たる puruṣa に、知覚による享受はないと説く。そうした論法より生ずる、現実相における対象の知覚の問題には、449, 450の影像説をもって応えるという手法である。

さらに注目すべきは、449の Vindh 断片中、puruṣa が無知覚 (acetana) であるとされる点である。SK-11 には

顕現は三徳 (より成る) ものであり、不相離であり、対象であり、共通であり、非智であり、能生性がある。勝因は同様であり、靈我はそれと (ある部分) 正反対であり、(ある部分) 同様である。

triguṇam aviveki viśayaḥ sāmānyam acetanaṃ prasava-dharmi /
vyaktaṃ tathā pradhānaṃ tad-viparitas tathā ca pumā //

(SK-11)

と述べられるが、このカーリカーに対し多くの古註は puruṣa の徳質を非精神的 (acetana) の反対 (viparita), すなわち cetana であると考えている。この Y-bindu 449 と SK-11 及び古註の表現上の相違は cetana という用語の意味上の変化を背景にしていると考えることができる。

例えば TK は SK 本文の cetana を caitanya に置換して註解することが多い。^② caitanya は仏教文献に多く現れる用語であるが、TK 作者がかなり意図的にこの用語を用いる背景に、puruṣa の精神性、あるいは puruṣa と prakṛti の結合より生ずる覚等の知覚作用に対する意識の変容を観るのである。TK は SK-11 に対し

「非精神的」とは、まさに勝因、覚等一切は非精神的であり、仏教徒 (vaiśiṣṭika) の (言うが) 如く精神性が覚にあるのではないという意味である。^③

と、図らずも caitanya という用語に纏まって意識する対象が仏教徒であることを露呈している。

ただし TK は「そして享受者たるものの適合性は、靈我の精神性 (caitanya)

である」と、Vyāsa や Y-bindu とは違って、精神性の所在を puruṣa と明記しており、対象認識の解説にはっきりとした影像説の導入はみられない。

ところが SS では YS, SK と異なり、本文に用例がみられる。

精神性は(肉体において)成立するものではない。何故なら個々別々の(諸元素)に認められないから。(SS-III-20)

na sāmsiddhikaṃ caitanyaṃ pratyekā' dṛṣṭeḥ

元素には精神性はない。個々別々(の諸元素)に認められないし、(諸元素が)結合された場合にも(認められないから)。結合された場合にも。

(SS-V-129)

na bhūta-caitanyaṃ pratyekā-'dṛṣṭeḥ sāmhatye'pi ca sāmhatye'pi
両スートラとも、元素(bhūta)の積聚物たる肉体(śarīra)には精神性が備わらないことを説く。おもしろいことに同じような論難が BS の Śāṅkara 註にもみられる。その記述するところよりみて、このスートラの対論者は順世派(Lokāyata)であるといえよう。

ここで、およそ肉体と呼ばれるものは全て我であるとの考えを持つ人々、すなわち順世派の人々は、肉体と分離された我の非存在を唱え、外部の結合(あるいは)分離たる地等の、肉体という形に変異した元素に不可視なる精神性があるというように(その考えを)正当化せしめている。それら(諸元素)より(生ずる)精神性が酩酊の力(madaśakti)の如く認識を生ぜしめる)。卓越した精神性の集りが puruṣa といわれるのである。(Śāṅkara ad BS-III-3-53)

ここにもちいられる「酩酊の力」を想定する対論者の紹介とその論難は、先の SS-III-20 に続く III-22 にも述べられており、SS 該当部分と BS の Śāṅkara 註が同一機軸にあることが分かる。

III-22 はあくまで対論者の紹介の形を採っており、註釈によれば、それは否定的紹介の意図を内在させている。TK が仏教を意識して caitanya を用いたのと同様、ここでも Lokāyata を意識した場合、caitanya という用語を用いざるを得ない時代背景がある。

総括すれば、TK, SS は caitanya という同語を用いながらも、内容的には SK の主張を逸脱することのない範囲内での利用にとどめている。それは SK の註釈ないしは継承經典といった成立の宿命に負うものであろうが、cetana→caitanya への置換の背後に仏教や順世派によって提唱される cai-

tanya への配慮が窺われる。一方 Vyāsa は、それよりもかなり自由に caitanya を使いこなしており、それは認識主体の所在そのものの問題として、先の upādhi と密接に関係している。その思想的源泉は、Pañcaśika を始めとする Sāṃkhya の古論師にもとめられることは、Y-bindu などの外的資料によっても明らかである。

ま と め

インドの思想は、基づくところ ātman の追求をその中心的課題としている。いまだ物質と精神の俊別の定まらぬウッダーカラの「有」の考察に端を発した哲学的思弁は、やがて物心両元の相互関係による転変説、すなわち、Sāṃkhya 思想を生んだ。その思弁的な最高峰に位置するのが SK であるといえよう。

しかしインドの思想の基底にあるのは究極的な様態における一元への指向である。総合的思弁的な SK の思想は、それとは異なった道程で発展していった他学派との交渉の場であって、分析的な方法論によっては了解し得ない精神活動の問題に往き当たる。ātman を否定することによって、哲学的思弁を超克する位相における自我への道を切り開いた仏教や、その影響の元に幻影的な宇宙論による ātman の実証を成し遂げた Śaṅkara、それに物質的要因の積聚による精神活動の実存を唱える順世派等、Sāṃkhya が特に配慮を必要とした学派であった。そうした他学派との交渉の元に Sāṃkhya は重要な思想転換の必要に迫られる。否、転換ではなく、Sāṃkhya の思想的潮流には SK とは異なったもう一つの流れがあったというべきであろう。Vindh, Āsri, Pañcaśika といった古論師から Vyāsa、そして SS とその註釈者に引き継がれてゆく一連の流れである。本論にみた如く、それは puruṣa が精神的(cetana)であるとする SK 的な形而上の論説より離れて、影像説を軸とした具体的な認識作用の主体としての精神性(caitanya)の問題を提示している。さらにそうした思潮が Sāṃkhya の古論師から Yoga (特に Vyāsa) を媒介として後世に受け継がれてゆく。それは Sāṃkhya のインド思想史上における発生と展開の必然的意義を内実化しているのである。

[略号]

AnAniruddha	BSBrahma-Sūtra
GaudGauḍapāda-Bhāṣya	JJayamaṅgalā

MTMāṭhara-Vṛtti	SKSāṃkhya-Kārikā
SSSāṃkhya-Sūtra	TKTattva-Kaumudī
VācVācaspatimiśra	VijVijñānabhikṣu
VindhVindhyavāsin	Y-bindu	...Yogabindu
YSYoga-Sūtra		

[使用したテキスト]

“THE BRAHMASŪTRA ŚAṆKARA BHĀṢYA with the Commentaries”
Vol. II 1981, Ahmedabad, Parimala SS. No. 1;

“THE SĀMĀKHYA TATTVA KAUMUDĪ OF ŚRĪ VĀCASPATI MIŚRA”
ed. by Dr. GAJĀNANA ŚĀṢTRI MUSALAGAONKAR, 1971, Kashi SS. 208;

“THE SĀMĀKHYA-PRAVACANA-BHĀṢYA” ed. by RICHARD GARBE
1895, HARVARD Univ., H. O. S Vol. II;

“ANIRUDDHA-VṚTTI-SAMETAM SĀMĀKHYASŪTRAM” 1964, Varanasi;

“ŚAḌḌARŚANASAMUCCAYA OF ŚRĪ HARIBHADRA SŪRI with the
Laghuvṛtti Commentary by Manibhadra Sūri” 1979, Varanasi, ChSS 95;

“YOGABINDU” 1968, Ahmedabad, LDSers 19;

“THE YOGASŪTRA OF PATAÑJALI” by BANGLI BABA 1976, Delhi;

註

① cf. “Die Genesis des Sāṃkhyasystems”

② cf. “Die Anfänge des Sāṃkhyasystem”

③ cf. “Sāṃkhya-Philosophie”

④ 『印度哲学から仏教へ』1976 岩波書店 参照

⑤ 「サーンクヤ・タットワ・カウムディー」『東北大学文学部研究年報』第7号
S31 参照

⑥ TK ad SK-5

⑦ cf. “UPĀDHI, UPĀDIET, UPĀDĀNA DANS LE CANON BOUDDHI
UE PĀLI” by Kamaleswar Bhattacharya

『龍谷大学 佛教文化研究所紀要』24集 1985に和訳

⑧ SS-I-51, 150, 151; VI-46, 59

⑨ liṅgaṃ vyāpyam liṅgi vyāpakam śaṅkita-samāropito-’pādhi-nirākaraṇena
vastu-svabhāva-pratibaddham vyāpyam / yena ca pratibaddham tad vyā-
pakam /

⑩ cf. ibid. K. Bhattacharya

⑪ pratikṣetraṃ puruṣabhede bhavati vyavasthā / na ca ekasyā’pi puruṣasya
deho-’pādāna-bhedād vyavasthā iti yuktam / pāṇi-ṣtanā-’dy-upādhi-bhede-

nā'pi janma-marṇā'di-vyavasthā-prasaṅgāt /

- ⑫ 村上真完『サーンキヤ哲学研究』春秋社 1979 第4章第2節参照
- ⑬ yathā cā'kāśaṃ vyāpakam prādesika-dhūmā'di-sambandhena na malinaṃ bhavati, kintu ghaṭā'dy-avacchinnam sad ghaṭa-dy-udaravartti sarvaṃ malinaṃ ity anumanyate / tatrā-'pi nā'kāśaṃ malinaṃ tasya lepā-'bhavāt, kintu avivekānām mityā-'bhimāna-mātram, ghaṭa-bhage tathā darśanāt / tathā'tmā'vyāpakaḥ, nā'sya dharmā-'di-samvandho nā'pi jñānaṃ kintu śarirā-'vacchedena marud-vahni-yoga-vat jīva-samvandhena mano-yogā-jīva-'tme-ity-ucyate
- ⑭ 中村了昭『サーンキヤ哲学の研究 インドの二元論』大東出版社 S57
村上真完 前掲書
本多恵 前掲書
- ⑮ ChSS XCX p. 33
- ⑯ 村上真完 前掲書 第4章第2節参照
- ⑰ 拙稿「サーンキヤ思想の歴史的展開の一視点 ―識別智 (vivekakhyāti) を介する考察―」『大谷大学大学院研究紀要』第1号 1984
- ⑱
- | | (A) | (B) | (C) | (D) |
|-----------|----------|----------------------|----------|---------------------|
| TK | SK-5 | SK-8 | (SK-5) | |
| SS | | | | SS-I-51
SS-VI-59 |
| Vij ad SS | | SS-I-150
SS-I-151 | | |
| An ad SS | SS-VI-59 | | SS-VI-59 | |
| Vindh | | | * | |
| Vadana- | | | * | |
- ⑲ cf. ⑱ SS-(D), An ad SS-(A) (C), Vindh-(C)
- ⑳ YS-II-20, Vij ad SS-I-99 にもみられる。
- ㉑ SK-70
- ㉒ 前掲拙稿参照
- ㉓ tathā sarvā-'rthā-'dhyavasāyakatvāt triṣṇā buddhis triṣṇatvād acetane'ti / guṇānām tū'padraṣṭā puruṣa ity ato na sarūpaḥ / astu tarhi virūpa iti / nā'tyantam virūpaḥ / kasmāt / śuddho'py asau pratyayā-'nupaśyaḥ / yataḥ pratyayaṃ bauddham anuveśyati tam anupaśyan na tad-ātmā'pi tad-ātmaka iva pratyavabhāṣate /
- ㉔ draṣṭā dṛśi-mātram śuddho'pi pratyayā-'nupaśyaḥ

②⑤ cf. SK-21

②⑥ cf. ②⑩

②⑦ cf. TK ad SK-20, 66

②⑧ acetanam / sarva eva pradhāna-buddhy-ādayo'cetanāḥ / na tu vaināśika-
vat caitanyam buddher ity arthaḥ /

②⑨ atra i'ke deha-mātrā-'tma-darśino lokāyatikā deha-vyatiriktasyā 'tmano-
'bhavaṃ manyamānāḥ / samasta-vyasteṣu bāhyeṣu pṛthivyādiṣv adṛṣṭam
api caitanyaṃ śarīrā-'kāra-pariṇateṣu bhūteṣu syād iti sambhāvantas
tebhyaś caitanyaṃ madaśakti-vad vijñānaṃ caitanya-viśiṣṭaḥ kāyaḥ puruṣa
iti cā'huḥ /

(本学特別研修員 インド学)